

令和 6 年度 道外農業行政視察の結果について【概要】

1. 日 時 令和 6 年 6 月 11 日(火)から令和 6 年 6 月 14 日(金)まで 3 泊 4 日
2. 参加者 山本会長職務代理(団長)、鈴木委員、鬼塚委員、川尻委員、首藤委員、藤田委員、鎌田委員、中川委員、川崎委員、石垣主事(事務局) 計 10 名
3. 視察先及び結果【概要】

■視察(1) 島根県出雲市「出雲やさい新話ファーム「出雲 vege」」

○事業概要について説明を受けたのち、植物工場（リーフレタスの水耕栽培）を視察。

- ・島根県の農業は、水稻を中心とした農業が特徴。
しかし、水稻の収益性の低下や他産業への担い手の流出などにより、耕作放棄地対策や新たな栽培品目の開拓、担い手の育成などが必要となり、JA いずもアグリ開発株式会社が JA の子会社として設立された。
- ・JA いずもアグリ開発(株)の生産部門は、①水稻、②果樹、③野菜の 3 部門。
水稻部門では、耕作放棄地対策として、出雲市の中心部に散在する約 43ha を受託耕作。果樹部門では、ブドウを栽培。島根県の特産品でもあり、新規就農が期待できる作物。新規就農希望者を雇用し、ブドウ栽培のノウハウを実践を通して学び、新規就農に繋げる研修機関的側面がある。
- ・野菜部門が出雲やさい新話ファーム「出雲 vege」。
社員 4 名、パート社員 21 名で運営。リーフレタスを水耕栽培。
- ・野菜部門の目的は、JA 組合員への新たな栽培品目のモデルの提示。
米は年 1 作、ブドウは年 2 作、年間を通して収入がある野菜に着目。
島根は、11 月から 2 月までは曇天が多く、日照量が少なくても生育するレタスを栽培品目として選択。リーフレタス生産は年 18 回転。
- ・植物工場は平成 31 年 2 月開設。事業費約 7 億円で 5 割は補助事業を活用。
鉄骨造りのハウス 16 連棟、総面積約 0.91ha。
- ・水耕栽培設備によりリーフレタスを水耕栽培。
水は上水道を使用し、地下タンクにより循環使用。
(使用後の水に足りない液肥を加えて再利用)
- ・植物工場内は育苗室以外は室温管理は特段していない。
(空気循環用にハウス内に送風機あり)
水温管理が最も経費がかかる。
- ・3 年前までは赤字であったが以降、黒字化



植物工場外観



植物工場外観



事業概要レクチャー



植物工場内視察



発芽室・育苗室



リーフレタスの苗



液肥管理装置



苗 床



■視察(2) 山口県防府市「山口県農林総合技術センター」

○山口県農業、同センターの概要について説明を受けたのち、センター内施設を視察。

【山口県農業の概要】

- ・県土の約7割が中山間地域。
- ・経営耕地面積 25,330ha、水田面積が全体の83%。生産基盤の水田の維持は重要課題。
- ・農業産出額(R3)643億円。米27.4%、野菜23.2%、果実8.1%、畜産32%。
- ・基幹的農業従事者16,613人。
平成12年：34,616人→令和2年：16,613人。20年で5割超減。
- ・日本で最も基幹的農業従事者が高齢化している県。
令和2年で平均年齢72.3歳(島根県72.0歳)
30歳代から50歳代が7.9%、60歳代が25%、70歳代以上が66.8%。
- ・高齢化による担い手不足に対応するため、県では集落営農法人を推進。
平成16年：13法人→令和4年：303法人。
- ・気候は、日本海側：冬季は日照時間が少ない、中山間地域：夏季は涼しく、冬季に積雪、瀬戸内海側：温暖で日照良好。
農産品は多様な立地条件による少量多品目生産。
- ・米の需給状況は全国と同様で、山口県も需要も供給(生産)も右肩下がり。
明るい側面としては、日本酒の製成量が増えているため酒米の作付面積が増加。
平成26年産：189.9ha→令和4年産：572.6ha。

【山口県農林総合技術センターの概要】

- ・県内に散在していた農業試験場(山口市)、林業指導センター(山口市)、農業大学校(防府市)を一か所(防府市)に統合し、令和5年度から供用開始。
- ・総敷地面積は約48ha。本館(職員事務室、実験室等)、連携・交流館(オープンラボやセミナールーム等)、大学、野菜・花き教育エリア、土壌・病害虫研究エリア、果樹研究・教育エリア等で構成。
- ・大学では令和5年度に、集落営農法人をはじめ大規模経営体で即戦力して活躍できる人材を育成するために「土地利用学科」を新設。
学生は、集落営農法人等での就農を希望する非農家出身の学生が多い。
- ・法人経営をリアルに体験するため、学生全員が社員の「一般社団法人やまぐち農大」を令和5年7月に設立。イベントで生産物を販売するなど、中小企業診断士等、外部専門家と連携し主体的な会社運営を実践学習。

【連携・交流館、トマト栽培ガラス温室を視察】

- ・連携交流館のオープンラボは利用者が主体的に機器を操作(職員は操作の助言)
- ・食品の栄養成分表示が義務化されたことにより、簡易栄養成分分析装置が人気。
- ・機器はそのほか、冷風乾燥機、真空凍結乾燥機、レトルト殺菌機、蒸気式回転窯など様々な機器がある。

- ・トマト栽培ガラス温室は、センターが開発した先進技術を取り入れた設備を用いて、農大生等が作物栽培を実践することにより、先進のスマート農業技術を学習するためのもの。(同様の温室はトマトとイチゴで各1棟あり)
- ・温室内の環境(温度、遮光、CO2等)はセンターが開発した制御システムでコントロール。制御プログラムは県内のベテラン農家から助言を得ながら構築。



本館外観



県農業・センター概要レクチャー



連携・交流館 外観



トマト栽培ガラス温室 外観



温室内環境制御システム



害虫対策で益虫(タバコカスミカメ)を飼養

